

植物
防疫
講座

虫害編-9

イネヒメハモグリバエの発生生態と防除

秋田県農業試験場 にい新 やま山 とく徳 みつ光

はじめに

イネヒメハモグリバエ（別名：イネミギワバエ）*Hydrellia griseola* (Fallén)（ハエ目：ミギワバエ科）は、九州以北の日本全土のほか、全ヨーロッパ、シベリア、中国、朝鮮、北アメリカ、北アフリカ等北半球の温帯地域に広汎な分布を持っている（桑山，1955）。

日本における害虫としての記録は1933年が最も古く、1937年に東北地方で著しい被害が記録されて以降、1940年代から1950年代にかけて北海道や東北地方を中心にたびたび大発生を繰り返している。特に1954年の北日本における本種の大発生は、冷害とあいまって未曾有の広汎かつ被害激甚なものとなった。しかし、その翌年の1955年は大いに警戒されたにもかかわらず、北海道の一部を除いてほとんど防除が不要なまでに影をひそめた（桑山，1955）。このように、本種は突発的に大発生したあとは継続して被害を与えることがないため、生態や異常発生の機構等についての知見が乏しく、いまだ不明な点が多い。近年では2013年に秋田県の沿岸部全域を中心に、その南北に隣接した山形県と青森県の一部地域で大きな被害を受け（新山ら，2014）、あらためて本種による被害の突発性を認識させられた。そのため、今後も発生推移に注意する必要がある。

I 形態

イネヒメハモグリバエの成虫は体長が2 mm程度、全体が暗灰色で背面は青銅色を呈する（図-1）。卵は白色で長さ0.7 mmの長楕円形である（図-1）。表面には約20条の浅い縦皺がある（加藤，1955）。幼虫は乳白色で老熟幼虫（3齢幼虫）の体長は約4 mmとなる（図-2）。蛹は最終齢の幼虫の外皮がそのまま蛹の外皮となっている（加藤，1955）。黄褐色～暗褐色のやや扁平な紡錘型で、長さは約3 mmである（図-2）。

Ecology and Management of the Rice Leaf Miner, *Hydrellia griseola*. By Tokumitsu NIYAMA

（キーワード：水稲害虫，イネヒメハモグリバエ，イネミギワバエ，発生生態，防除）



図-1 イネヒメハモグリバエの成虫と卵（撮影：高橋良知氏）



図-2 イネヒメハモグリバエの幼虫と蛹（撮影：高橋良知氏）

II 近似種コトニミギワバエとの区別

1959年、北海道で水稻の葉を食害するコトニミギワバエ *Hydrellia ischiaca* Loew が発見された（富岡ら，1983）。その後の調査で、本種は日本全土で見られ、多くの地方で近縁のイネヒメハモグリバエと混発して、発生子察上誤認されてきた可能性がある」と指摘された（石崎，1976）。両種は発生時期や食害の仕方，食痕中に多数の糞が残る等の違いがあることが報告されており（石崎，1976），成虫の形態にも表-1のような違いがある。両種の特徴を確認できるように写真を図-3に示した。